

気分障害者の火のある風景描画法 Fire in Landscape Techniqueに関する一考察

石 田 弓¹⁾

A Study on "Fire in Landscape Technique" in Mood Disorders Clients

Yumi ISHIDA¹

Department of Psychology, University of Tokushima

ABSTRACT

The purpose of the present study is to examine the meaning of drawing content and style of Mood Disorders Clients in "Fire in Landscape Technique (FLT, for short)". In this study, the subjects were divided into the groups with Bipolar Disorders and with Depressive Disorders. The differences of drawing features were found in the flaring of "Fire", and in its coloring and size. The results indicated that the difficulty to control affection in Bipolar Disorders Clients was projected on those drawing features. In addition, some drawing features of Bipolar and Depressive groups were contrastively analyzed with Normal group, Personality Disorders group and Schizophrenia group. As a result, some peculiar drawing features to Bipolar and Depressive groups were found to significantly reflect their pathology. In conclusion, it was suggested that dividing Mood Disorders Clients in Bipolar and Depressive groups was important in the study on Clinical Drawings for Mood Disorders Clients.

Key Words: Bipolar Disorders, Depressive Disorders, Fire in Landscape Technique

目 的

火のある風景描画法 Fire in Landscape Technique (以下, FLTと略す) は, 筆者が考案した臨床描画法であり, これまでに健常者, 人格障害者, 分裂病者のそれぞれに特有な描画内容, 描画形式を明確にした (石田, 1996a, 1996c)。そして, これらの3群のFLTを弁別したり, 人格障害や分裂病の病理特性をアセスメントするのに有効な基礎的データを整理した。

しかし, 分裂病者の描画に関する研究が活発に行われてきたのに対して, 気分障害者の

1) 徳島大学総合科学部

1. Faculty of Integrated Arts and Sciences,
The University of Tokushima

描画に関する研究は多くない。そこで、本研究ではF L Tを気分障害者に施行し、その描画特徴を明確にする。なお、ここでは従来から躁うつ病、うつ病と呼ばれてきた精神障害をD S M-IVに従って気分障害Mood Disordersとし、躁うつ病あるいは双極性うつ病を双極性障害Bipolar Disorders、うつ病あるいは単極性うつ病をうつ病性障害Depressive Disordersとした。

まず、気分障害者の描画に関するこれまでの研究の幾つかを概観する。高橋（1974）は抑うつ状態におけるH T Pテストの描画特徴として以下のものを挙げた。①描画像を用紙の下の方に描き、サイズが小さい、②用紙の下縁を地面の線とする、③詳細さがなく、必須部分を省略する、④弱々しい線、⑤小さくて空虚な印象の家、⑥1本線だけの幹、⑦枯れ木や葉のない枝、⑧幹の濃い陰影、⑨夕日、⑩黒い衣服など。大森・高江洲（1981）は臨床現場におけるうつ病者の描画やうつ病に罹患していたと考えられる画家の絵画を通して以下のような描画特徴を見出した。①生命観の枯渇、②荒涼とした無人の世界、③不吉・不安・死のテーマ、④描画時間の延滞、⑤色彩が少ない、⑥空白が目立つ、⑦筆圧が弱い、⑧描線がか細い。また、回復期には⑨細部までの几帳面な描き込み、⑩シンメトリーの強調、⑪奥行き強調などが見出された。越川（1989）は健常者、分裂病者、うつ病者それぞれ50名に統合型H T P法を施行し、統計的手法を用いて以下のような描画特徴を見出した。健常者に比べて①遠近感に乏しい、②課題羅列で付加物がほとんどない、③空虚な空間が大きい。分裂病者に比べて④全体の構成が崩れている、⑤筆圧が弱い、⑥描画サイズが小さい、⑦現実検耐力が低いなど。三上（1995）は「躁うつ病、うつ病、あるいは“うつ状態”と診断されていた患者38名」にS-H T P法を施行し、描画特徴の出現率を百分率で示した上で以下のような考察を得た。①統合的である方が、羅列的であるよりも予後が良好である可能性が高い、②統合的で描画サイズが大きい場合、心因性のうつ状態である可能性が最も高い、③羅列的で描画サイズが小さい場合は、内因性うつ病の可能性が最も高い、④羅列的な絵を描き、予後が不良の場合は、非定型精神病の可能性が高いなど。以上の研究において気分障害者の描画に共通して表される特徴は、①サイズが小さい、②弱々しい描線、③空白および空虚な空間、④課題の羅列などであった。

しかし、これらの研究では双極性障害とうつ病性障害の区別がなされていなかったり、統計的手法によって描画の客観的特徴が明確にされていないもの、性差や年齢差が統制されていないものなどがある。そこで、本研究では気分障害者を双極性障害群（以下、双極群と略す）とうつ病性障害群（以下、うつ群と略す）に分類し、各群が示すF L Tの描画特徴の意味を考察する。そして、まだ数少ない気分障害者の描画研究に対して新たな知見を増やすこと、また、火というアルカイックな描画課題への反応を通して気分障害者の内的世界に対する理解を深めていくことを本研究の目的とした。さらに、これらの2群のF L Tと先行研究（石田、1996c）で得られた健常群、人格障害群（以下、人格群と略す）、分裂群（以下、分裂群と略す）のデータを比較することで、各群の病理特性と描画特徴の関連を考察する。これによって臨床場面でF L Tを用いる際に有効性の高い基礎的データを増やすことができると思われる。

なお、本研究においても対象者は統計的手法を用いることができるほど多くないが、可能な限り客観的な特徴を見出すために各描画特徴の出現率を百分率で示すこととした。

方法

- 対象者：双極群17名（男性11名，女性6名：平均年齢39.7歳）。うつ群15名（男性8名，女性7名：平均年齢57.2歳）。
- 分類方法：双極群とうつ群の判別は医師の診断やロールシャッハテストなどの心理検査結果をもとに行った。前者は明らかな躁病エピソードとうつ病エピソードを繰り返し呈するものであり，後者はうつ病エピソードだけを呈するものであった。
- 評定手続き：本研究ではF L Tの描画内容と描画形式を評定した。なお，描画の評定基準は従来のも（石田, 1996a）に多少の変更を加えている。「火の躍動感」は「火の周囲を鋸歯状に描くもの」であったが，現在では「火の周囲を鋸歯状に描いたり，火をくねらせたりなどして火の動きを表現したもの」と変更している。また，火の躍動感の「統制なし」は「著しく統制を欠いたもの」に限定している。「火のサイズ」は新たに「特大」「特小」を加えている。「標準」を画用紙を9分割したものの約1個分の大きさとし，「大」はこれの2倍程度まで，「特大」は3個以上，「小」は2分の1～4分の1程度，「特小」は8分の1以下としている。

結果

双極群とうつ群の描画内容と描画形式の特徴を分析し，その結果を表1～3に示した（出現率を百分率で示した）。また，先行研究（石田, 1996c）で得られた健常群，人格群，分裂群の描画特徴の出現率を算出し，双極群とうつ群の出現率と比較したものを表4に示した。さらに，典型的なF L Tを図1～12で示した。以下に双極群とうつ群それぞれの描画特徴を要約し，両群に共通する描画特徴と異なる描画特徴を健常群，人格群，分裂群の描画特徴と比較検討する。

●双極群の描画特徴

- ・火の内容では「焚火」が最も多かった（29%）。
- ・「破壊的な火」（12%）は「団欒の火」（24%）よりも少なかった。「団欒の火」を描いたのは全て男性であった（図1, 3）。
- ・火の形態では「H型（上下に開きのない平行型）」（29%：図2）と「特殊型（形態はあるが特に分類できないもの）」（24%：図3）がやや多かった。
- ・火の躍動感では「激」（図2, 3, 4, 5, 6）が多く（53%），躍動感の統制は「あり」が多かった（76%）。
- ・火の輪郭線では「輪郭線なし（火の形態を有するもので）」（図1, 2, 3, 6）が多かった（59%）。
- ・彩色数では「2色」以上（図2, 3, 6）用いたものも半数近くみられた（47%）。彩色濃度や彩色密度では「普通」が多かった（82%, 76%）。
- ・風景物を描くものが多く（71%），風景中に季節感や時間感覚が読みとれるものも多かった（59%, 65%：図1, 3）。また，風景中に何らかの「水」を描くものが18%みられた（図4『火事』）。
- ・火の距離感では「近景」（図2）が半数近くみられ（47%），「アップ」も24%であった（図5, 6）。
- ・火のサイズでは「特大+大」（図5, 6）と「特小+小」（図1）がともに42%であった。

表1 火の内容

火の内容	双極群(17名)			うつ群(15名)		
	男	女	計(%)	男	女	計(%)
焚火	3	2	5(29)	3	4	7(47)
キャンプファイ	3	0	3(18)	0	0	0(0)
火事・山火事	2	0	2(12)	2	1	3(20)
篝火	2	0	2(12)	0	0	0(0)
ガソリンの火	1	0	1(6)	1	0	1(7)
太陽	0	1	1(6)	1	0	1(7)
暖炉の火	0	1	1(6)	0	0	0(0)
心の火	0	1	1(6)	0	0	0(0)
松明	0	1	1(6)	0	0	0(0)
かまどの火	0	0	0(0)	1	0	1(7)
とんどの火	0	0	0(0)	0	1	1(7)
草焼きの火	0	0	0(0)	0	1	1(7)

表2 人の登場および「団圓の火」

人の登場	双極群(17名)			うつ群(15名)		
	男	女	計(%)	男	女	計(%)
なし	5	4	9(53)	4	4	8(53)
1名	1	2	3(18)	0	3	3(20)
複数人	5	0	5(29)	4	0	4(27)
団圓の火	4	0	4(24)	3	0	3(20)

表3 描画形式

描画形式		双極群(17名) 男 女 計(%)			うつ群(15名) 男 女 計(%)			描画形式		双極群(17名) 男 女 計(%)			うつ群(15名) 男 女 計(%)		
形 態	V型	0	3	3(18)	1	0	1(7)	彩色 密度 無彩色	密	1	0	1(6)	0	1	1(7)
	A型	1	1	2(12)	1	1	2(13)		普通	8	5	13(76)	4	2	6(40)
	H型	4	1	5(29)	1	3	4(27)		疎	2	1	3(18)	3	4	7(47)
	O型	0	1	1(6)	1	1	2(13)		密度	0	0	0(0)	1	0	1(7)
	特殊型	4	0	4(24)	2	1	3(20)		無彩色	0	0	0(0)	1	0	1(7)
	形態崩壊	2	0	2(12)	2	1	3(20)		特大	1	2	3(18)	0	1	1(7)
躍 動	激	6	3	9(53)	1	2	3(20)	サイ ズ	大	4	0	4(24)	0	0	0(0)
	多少	2	1	3(18)	5	3	8(53)		標準	0	3	3(18)	2	3	5(33)
	なし	3	2	5(29)	2	2	4(27)		小	3	1	4(24)	2	1	3(20)
感	統制あり	7	6	13(76)	5	6	11(73)	距離	遠景	1	1	2(12)	1	0	1(7)
	統制なし	4	0	4(24)	3	1	4(27)		中景	3	0	3(18)	4	1	5(33)
輪 郭 線	あり	2	3	5(29)	0	0	0(0)		近景 アップ	6	2	8(47)	2	5	7(47)
	なし	7	3	10(59)	6	6	12(80)			1	3	4(24)	1	1	2(13)
	(崩壊)	2	0	2(12)	2	1	3(20)	風景物あり		9	3	12(71)	7	4	11(73)
火の中心強調		1	1	2(12)	0	0	0(0)	季節感あり 時間感覚あり 水の存在		6	4	10(59)	5	4	9(60)
彩色 数	0色	0	0	0(0)	1	0	1(7)	描 線	丁寧	0	0	0(0)	0	1	1(7)
	1色	6	3	9(53)	6	6	12(80)		普通	8	5	13(76)	5	2	7(47)
	2色	5	3	8(47)	1	0	1(7)		乱雑	3	1	4(24)	3	4	7(47)
	3色以上	0	0	0(0)	0	1	1(7)		筆 圧	強	0	1	1(6)	0	0
彩色 濃 度	濃	1	1	2(12)	0	1	1(7)	弱	普通	10	5	15(88)	7	4	11(73)
	普通	9	5	14(82)	6	3	9(60)		1	0	1(6)	1	3	4(27)	
	淡	1	0	1(6)	1	3	4(27)								
	無彩色	0	0	0(0)	1	0	1(7)								

表4 各群における主な描画特徴

主な描画特徴	健常	人格	分裂	双極	うつ
焚火	18	40	18	29	47
破壊的な火	8	24	32	12	20
複数人の登場	52	16	6	29	27
団圓の火	52	12	4	24	20
H型	16	10	12	29	27
O型	48	28	26	6	13
崩壊	4	12	18	12	20
躍動感激	22	38	42	53	20
躍動感多少	36	38	22	18	53
躍動統制あり	94	76	70	76	73
輪郭線なし	84	56	36	59	80
1色以下	14	40	58	53	87
2色以上	86	60	42	47	14
彩色淡(+無)	10	6	12	6	34
彩色疎(+無)	8	36	48	18	54
特大+大	38	40	38	42	7
特小+小	46	48	48	42	60
距離近景	52	34	38	47	47
距離アップ	14	38	36	24	13
風景物あり	94	56	50	71	73
水の存在	18	0	2	18	33
描線乱雑	8	26	40	24	47
筆圧弱	4	0	4	6	27

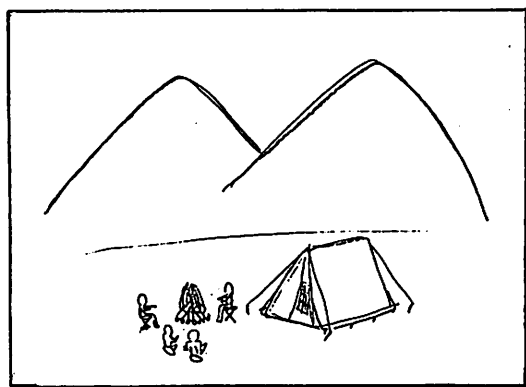


図1 双極群男性46歳「キャンプファイヤー」

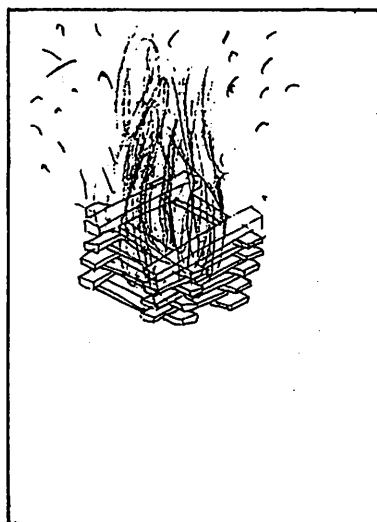


図2 双極群男性42歳「キャンプファイヤー」

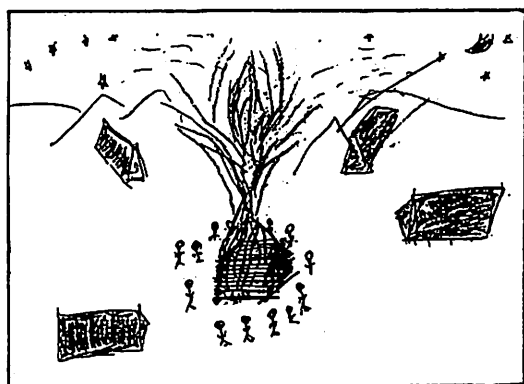


図3 双極群男性32歳「キャンプファイヤー」

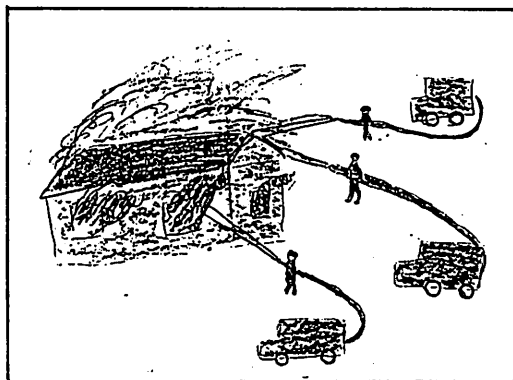


図4 双極群男性64歳「火事」

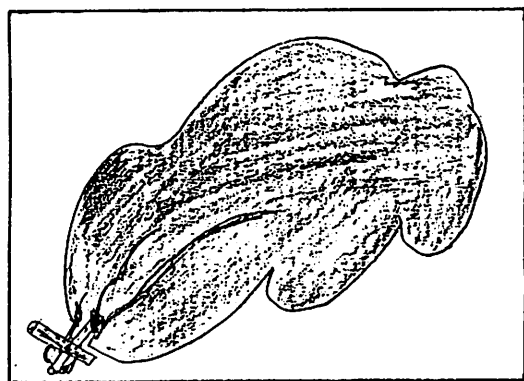


図5 双極群男性54歳「篝火」

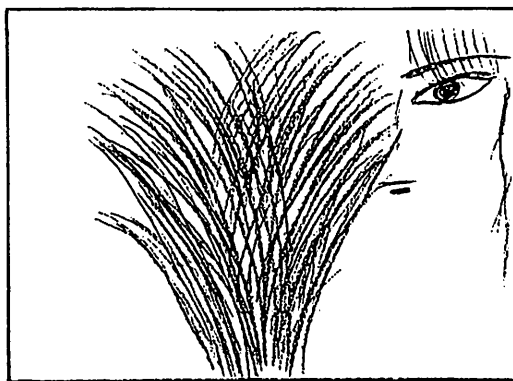


図6 双極群女性15歳「心の火」

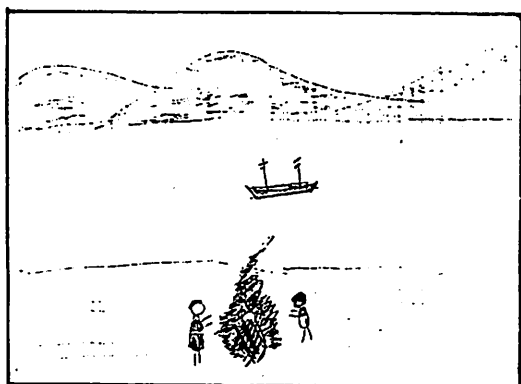


図7 うつ群男性52歳「焚火」

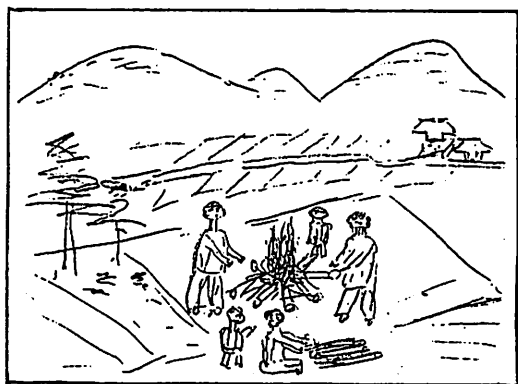


図8 うつ群男性55歳「焚火」

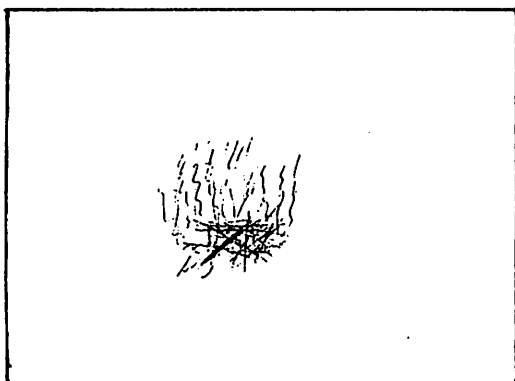


図9 うつ群女性70歳「焚火」

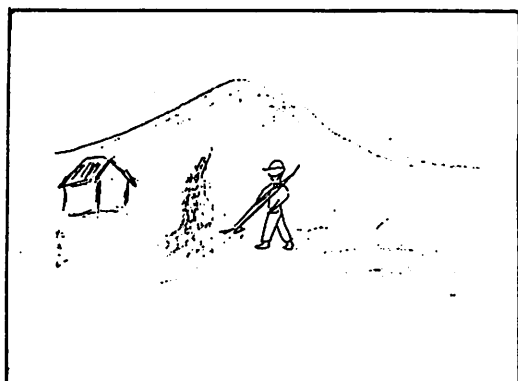


図10 うつ群女性55歳「焚火」

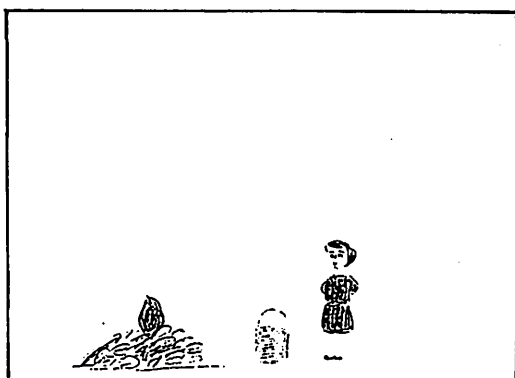


図11 うつ群女性45歳「焚火」

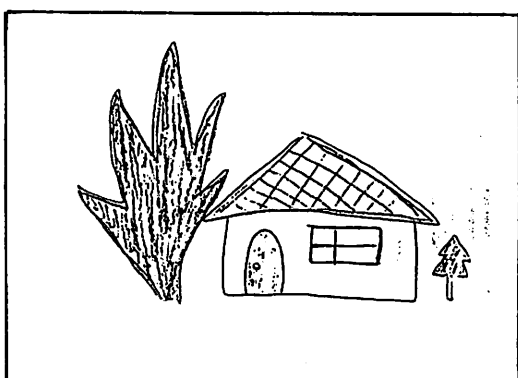


図12 分裂群女性27歳「火事」

- ・描線の特徴では「普通」が76%、「乱雑」が24%であった。筆圧では「普通」が多かった（88%）。

●うつ群の描画特徴

- ・火の内容では「焚火」が最も多かった（47%：図7, 8, 9, 10, 11）。
- ・「団樂の火」と「破壊的な火」はともに20%であった。「団樂の火」を描いたのは全て男性であった（図7, 8）。
- ・火の形態では特に差はないが、「H型」がやや多かった（27%：図8, 9）。また、かろうじて形態を有する「準崩壊」も20%みられた（図9）。これを描いたものは高齢者が多かった（59, 70, 74歳）。
- ・火の躍動感では「多少」（図7, 8, 9）が過半数を占めていた（53%）。躍動感の統制も「あり」が多かった（73%）が、中にはかろうじて「統制あり」のもの（上述の「準崩壊」の3名）もあり、これを差し引くと53%になった。
- ・火の輪郭線では「輪郭線なし」（図7, 8, 9, 10, 11）が多く（80%）、形態が準崩壊のものを差し引いても60%であった。「輪郭線あり」は1例も見られなかった。
- ・彩色数では無色彩を含む「1色」以下（図8, 9, 10, 11：「無彩色」は図8）が多かった（87%）。彩色濃度では「普通」が多かった（60%）が、「淡」（図9, 10）も27%みられた。彩色密度では「疎」（図9, 10）が半数近くみられた（47%）。
- ・風景物を描くものが多く（73%）、風景中に季節感や時間感覚が読みとれるものが多かった（60%, 67%）。また、風景中に何らかの「水」を描くものが33%みられた（図7『海』, 図11『バケツの水』）。
- ・火の距離感では「中景」（33%：図7）と「近景」（47%：図8, 9, 10, 11）が大半を占め、「アップ」は13%であった。
- ・火のサイズでは「特小+小」（図8, 10, 11）が多く（60%）, 「特大+大」はわずかであった（7%）。
- ・描線の特徴では「普通」と「乱雑」がともに47%であった。筆圧では「普通」が73%で、「弱」（図9, 10）も27%みられた。

●両群の共通点と健常群、人格群、分裂群との比較

- ・「焚火」は両群に最も多くみられたが、これは健常群、人格群、分裂群と同傾向にあった。ただし、出現率からみるとうつ群と人格群が特に多かった。
- ・「破壊的な火」は両群とも特に多くなく（12%, 20%）、分裂群に最も多くみられた。
- ・両群の「複数人の登場」の出現率は健常群にはおよばないが、人格群や分裂群よりも高かった。また、「団樂の火」は男性対象者にのみみられたが、これは分裂群と大きく異なる点であった。
- ・火の形態は健常群、人格群、分裂群に「O型（蠟燭の火型・丸形）」が描かれやすかったのに対して、これらの2群では「H型」がやや多かった（29%, 27%）。「形態崩壊」では人格群や分裂群と差はなかった。
- ・火の躍動感の統制は人格群や分裂群と特に差はなかったが、健常群とは約20%の差がみられた。
- ・両群とも火の輪郭線を描かないものが多かった（59%, 80%）。特にうつ群では輪郭線を描いたものはおらず、健常群に近い傾向にあった。「輪郭線あり」が最も多かったのは

分裂群であった。

- ・両群とも風景物を描くものが多く（71%, 73%），風景中に何らかの季節感や時間感覚を読みとることができた。これは人格群や分裂群と大きく異なる点であった。「山」や「海」を描くこと（図1, 3, 7, 8, 10）で風景空間に奥行きと広がりを感じさせるものも多かった。
- ・「水の存在」の出現率が人格群や分裂群よりも高く，「消火」に関するテーマ（「破壊的な火」を消火しているものもあった）が描かれやすかった（「水」を描いた8名のうち4名）ことも他の群と異なる点であった。
- ・火の距離感では両群とも「近景」が多く，健常群，人格群，分裂群と特に差はなかった。

●両群の相違点と健常群，人格群，分裂群との比較

- ・火の躍動感では双極群に「激」が多く（53%），うつ群では「多少」が多くみられた（53%）。特に「激」の出現率は双極群が最も高く，うつ群や健常群は低かった。
- ・彩色数は双極群では「2色」も多かった（47%）が，うつ群の大半は「1色」であった（87%）。しかし，健常群や人格群で「2色」以上が半数以上であったのに比較すると双極群や分裂群は「1色」が多いと言える。また，彩色濃度「淡」は双極群では6%であったのに対して，うつ群では27%（無彩色を含めると33%）であった。他の3群と比較してもうつ群は彩色が淡い傾向にあると言える。また，彩色密度「疎」も双極群では18%であったのに対して，うつ病群では47%（無彩色を含めると54%）であった。人格群と分裂群も「疎」は多かった。
- ・火のサイズは双極群では大きな火も小さな火も描かれたが，うつ群では小さな火が多く，大きな火はわずかであった。健常群，人格群，分裂群の間でも「特大+大」と「特小+小」の出現率には差がなく，うつ群は小さい火を描く傾向があると言える。
- ・描線が「乱雑」なものが双極群では24%であったのに対して，うつ群では47%であった。これは分裂群に近いが，うつ群の「乱雑」は「激しい」と言うよりも「脆い」印象を与えるものが多かった（図9）。また，筆圧が「弱」のものは双極群では少なかったが，うつ群では27%みられた。うつ群以外の4群では筆圧「弱」の出現率に大きな差はなかった。うつ群の筆圧は弱いと言える。

考察

双極群とうつ群のFLTの描画特徴と各群の病理特性との関連について考察する。また，健常群，人格群，分裂群との比較によって各群に特有の描画特徴の意味を検討する。

1. 描画内容

火の内容における「焚火」の描かれやすさは，全ての群に共通していた。これは「焚火」が最もありきたりで無難な内容であるためであり，「焚火」はFLTにおける平凡反応と言える。したがって，これを描くものは情動負荷の高い課題や自己表出を迫られるような課題に対しても適切な対応ができるが，ややもすれば表面的・常識的な対応となり，積極的に個性を発揮していくことがないと考えられる。また，うつ群に「焚火」が多くみられたことは，うつ状態や緊張状態において精神エネルギーが低下し，思考・想像活動や情緒活動が抑制されやすいうつ病性障害者の病理特性を表していると思われる。さらに，人格群にも「焚火」が多くみられた。人格群では「破壊的な火」も描かれやすく，彼らの

認知が攻撃欲動に色づけられやすいことを反映していると考えてきた（石田, 1996c）。しかし、その一方で彼らが真に個性的であり得ず、課題処理においても紋切り型の対応になりやすい傾向が「焚火」に表されているのかもしれない。

次に複数の人間が描画中に登場し、火の内容が「団欒の火」であるものが、人格群や分裂群よりも双極群とうつ群に多くみられた。分裂病者の人を描くことの少ない傾向は、三上（1995）のS-HTP法の研究でも報告されている。筆者はここで分裂病者と気分障害者の対人関係の特徴に注目した。Shulman（1968：坂口ら訳）は「分裂病者は他者と距離をおく必要があり、組織的に自己と他者のコミュニケーションと合意性の絆を破壊してしまう」が「躁うつ病者は必死に他者を理解しようとする…情緒面での混乱がどんなにひどくても、ちゃんと“かかわり合い”をもち続ける」と述べている。また、飯田（1974）は「（うつ病者が）他人に気を配り献身的につくし、他人と一体化して生きる傾向にある」と述べ、大原（1981）も「（躁うつ病者には）人間関係では、他者本意で、他人に献身的につくし、他者と一体化して生きる傾向がある」と述べている。こうした気分障害者の他者本意の存在様式や対人希求の側面が、火のもつ対人結合的機能に刺激されて「複数人の登場」や「団欒の火」として表されるものと思われる。一方、自己中心性のゆえに他者との安定した対人関係が維持できない人格障害者や外界から引きこもり他者とのつながりを喪失しがちな分裂病者では描画の中にも他者との親密な関係が表されにくいと考えられる。なお、「団欒の火」が男性気分障害者のみに表れたことについては今後の検討を要するところであるが、描画後の質問では7名中4名が「家族の団欒」をテーマとしていた。一家の長として家族のつながりを維持しなければいけない思いや家族への依存欲求を表すものなのかもしれない。

一方、火事などの「破壊的な火」が双極群とうつ群に少ないことも分裂群と異なるところである。これは攻撃性をあからさまに外界に向けず、むしろ自己に向けてしまいがちな彼らの攻撃欲動に対する防衛のあり方を表しているのかもしれない。また、これは後述の「水の存在」において「消火用の水」が両群に描かれやすかったこととも関連しているのかもしれない。

なお、描画理解においては描画内容と描画形式の関連を無視することはできない。火の内容が仮に「焚火」であっても、これがいかなる形式で描かれたかによって描画理解は異なってくることに注意する必要がある。

2. 描画形式

●双極群とうつ群の描画特徴が示すもの

双極群で描かれやすい火の形式的特徴をまとめると、火の形態は「H型」や「特殊型」がやや多く、火の躍動感は激しいが、その統制は著しく不良ではなかった。火の輪郭線は描かれないものも多く、色彩が2色以上用いられることも多かった。また、火のサイズは大きいものと小さいものの両方があり、火の距離は「近景」「アップ」が多かった。風景に関しては、風景物が描かれることが多く、風景中に季節感や時間帯、あるいは広がりや奥行きが示されることも多かった。

一方、うつ群で描かれやすい火の形式的特徴をまとめると、目立った形態はなく、火の躍動感は控え目で、火の輪郭線を描くものはなかった。色彩は1色のみが多かった。また、火のサイズは小さく、火の距離は「中景」や「近景」が多かった。描線は雑というよりも

脆い印象のものが多く、筆圧も「弱」が多かった。風景に関しては、風景物が描かれやすく季節感や時間帯、空間的広がりが見られるものが多かった。

火の形態ではこれまでに健常群の「O型」や人格群と分裂群の「形態崩壊」以外に目立ったものはなかった（石田, 1996a, 1996c）。本研究でも双極群とうつ群に特有の火の形態は見出されなかった。しかし、人格群や分裂群の25%以上にみられた「O型」は少なく、逆に人格群や分裂群に少なかった「H型」が多かった。佐藤（1978）によると「H型」の火は「O型」と同じく「火一般に考えられている原初的な生命性は薄い」とされている。筆者は「O型」を情緒安定や紋切り型思考の指標と考えてきた（石田, 1996a, 1996c）。しかし、「H型」の火は「O型」ほどまとまりを備えていないことから、「H型」はうつ状態における「生命性」や自我の統合力の低下と関連しているのかもしれない。しかし、現段階では火の形態のみから各群の病理特性を把握することは控えた方がよいと思われる。

火の躍動感では各群ごとの特徴が見られた。火の躍動感「激」が双極群や分裂群の40%以上にみられたのに対して、健常群やうつ群では20%程度であった。逆に躍動感が穏やかな「多少」がうつ群の53%にみられ、分裂群や双極群では少なかった。双極性障害者や分裂病者の火の躍動感の激しさは火という情緒刺激によって喚起された情動の統制困難を示し、逆に活動性の抑制や萎縮が主症状であるうつ病性障害者では火の躍動感も控え目になるのかもしれない。火の躍動感は易刺激性や情動の発散のされやすさの程度と関連していることが考えられる。また、躍動感の統制に関しては、健常群以外の群に差はなく、健常群と他の群の間にのみ差がみられた。健常群以外の群の情緒統制の困難さが躍動感の統制の悪さにも表されると考えられる。

火の輪郭線では分裂群以外の群の50%以上が「輪郭線なし」であり、特に健常群とうつ群は80%以上であった。筆者は火の輪郭線が火の躍動感に投射される情動の表出を抑制したり、統制を欠きやすい情動をなんとか統制しようとする自我機能を象徴すると考えてきた（石田, 1996a）。

双極群では輪郭線はないが躍動感の統制の良い健常群に似た火（図1, 3）も多くみられた。こうしたものは描画施行時の情緒の安定を表していると考えられる。しかし、躍動感が激しく、輪郭線による統制もない火は（図2, 4）は躁状態における情動の発散の激しさを示唆していると思われる。

一方、うつ群では火の輪郭線を描くものはなかった。こうした火のサイズは小さいものが多く（図8, 10, 11）、輪郭線という枠で情動を統制する必要がないことを意味しているのかもしれない。むしろ、うつ群において問題になるのは数名にみられた「形態崩壊」や「準崩壊」の火（図9）である。これらは輪郭線によって火の形態を維持できない、すなわち人格の統合を維持できないほど精神エネルギーが低下していることを表していると考えられる。

なお、健常群のように情緒表出が柔軟であり、その統制も適切である場合は、輪郭線がなくとも適度な躍動感と統制のある火が描かれると考えられる。また、分裂群にしばしばみられる躍動感「激」の輪郭線（図12）は情動の統制というよりも外界に向かう攻撃性や敵意の潜在を示していると思われる。以上のことから、火の輪郭線は火の形態や躍動感およびサイズなどとの関連から情動表出を統制する機能をもつのか、人格の統合を維持しようとする努力の表れのなのか、外界に向かう攻撃的傾向なのかを判断する必要がある。

火の色彩では双極群は彩色数が多いが、うつ群は彩色数が少なく、彩色濃度が淡く、彩色密度も「疎」が多かった。特に彩色数における「1色」以下と「2色」以上の出現率の比が健常群とうつ群でほぼ逆になっている。大森・高江洲（1981）もうつ病者の描画において色彩が少ないことを述べている。色彩への関与の乏しさは感情表出や内的世界の乏しさなどに関連しており、うつ病者の中核的問題である「生命感情の低下」（大原, 1981）を示していると言えそうである。

しかし、色彩への関与は単に情緒面での豊かさの程度を示すだけでなく、外的刺激に対する反応性という視点からみることもできる。例えば、高橋・北村（1984）はロールシャッハテストにおいてうつ病者は「暗い気持ちを抱いているために、色彩に関心をもって積極的に反応しようとしない」、あるいは「環境への感受性を失い無関心になっている」ので色彩ショックが生じないと述べている。また、村田・星野・大原（1983）は単極性うつ病者と双極性うつ病者のロールシャッハテストの色彩への反応について「単極性うつ病群では色彩反応はほとんど示されないのに対して、双極性うつ病群ではうつ状態においても色彩への反応性が保たれている」と報告し、前者では「抑制的で、自己の感情表現の回避という元来の性格傾向が反映されている」と考察している。ロールシャッハテストと描画法では投映法としての質が異なるが、うつ群における彩色の乏しさは刺激状況を回避しようとする防衛的な意味をもち、これによって情緒の安定を維持していることが考えられる。逆に双極群や分裂群の彩色数「2色」以上が40%以上であったことは、これらの群とうつ群の外的刺激への反応性の違いを示していると考えられる。また、彩色密度「疎」に関してはうつ群と分裂群に出現率の差はないが、分裂群の色彩の用い方が乱雑であるのに対して、うつ群では弱々しさがうかがわれた。こうした点にも彼らの精神エネルギー水準や外的刺激への反応性の違いが表されるものと思われる。

火のサイズでは健常群、人格群、分裂群および双極群における「特大+大」と「特小+小」の出現率にほとんど差はなかった（40～50%）が、うつ群のみが「特大+大」10%未満、「特小+小」60%であった。越川（1989）、三上（1995）、高橋（1974）もうつ病者および抑うつ状態の描画サイズが小さい傾向にあることを報告している。しかし、本研究では躁病エピソードをもつ双極群は大きな火を描く傾向があること、逆に躁病エピソードをもたないうつ群では小さな火が多く、大きな火はわずかであることが明らかになった。このことから火のサイズは精神エネルギー水準や活動性と関連があり、双極群にみられる大きな火（図5、6）は情動の統制が病的なまでに欠如しやすい傾向や自我の肥大傾向を反映しているのかもしれない。逆にうつ群の小さい火は抑うつ状態、あるいはうつ病性障害者における思考や情緒の抑制・萎縮傾向、活動性の低下などを表していると考えられる。

火の距離では両群とも「近景」が多かったが、「アップ」の出現率は双極群の方が高かった。他に「アップ」が多い群には人格群と分裂群があり、これは火という課題への巻き込まれやすさ、すなわち外的情緒刺激から距離をとれない易刺激傾向を示すものと考えられる。しかも双極性障害者の躁状態における易刺激性と喚起された情動を統制できず外界に発散してしまう傾向は図5、6のように「アップ」かつ「特大」の火に表されるものと思われる。一方、うつ病性障害者では情緒刺激に反応してもこうした火が描かれることは少ない。情動の発散のされ方の違いは火の距離とサイズの関連から検討することができると考えられる。

次に双極群とうつ群のF L Tには風景物が描かれやすいために風景全体に季節感や時間感覚および奥行きや広がりを感じられるものが多かった。これは健常群のF L Tに近く、人格群や分裂群と大きく異なる点である。この傾向はうつ病性障害者が統合型H T P法において付加物を描くことが少なかった越川（1989）の研究結果と異なるが、大森・高江洲（1981）の研究におけるうつ病者の回復期の描画特徴と一致する。気分障害者が現実の世界を描く傾向にあることは、村田ら（1983）が述べるうつ病性障害者の「現実指向性」や「風景」という教示に忠実に応えようとする几帳面さ・固執傾向と関連していると考えられる。また、風景描写への関与を多くすることで火という課題のもつ刺激を避けようとする事が表されているのかもしれない。

また、風景中に「水」が描かれやすいことも双極群とうつ群に特徴的であった。しかも「破壊的な火」の「消火」がテーマになっているものは分裂群女性1名にみられただけであり、健常群にもみられなかった。双極性障害者やうつ病性障害者の強い超自我傾向、すなわち火によって攻撃欲動が喚起されても強い超自我によってこれを抑えてしまおうとする傾向や高まった攻撃欲動とリビドー欲動の中和のプロセスが「消火」という形で象徴的に表されているのかもしれない。いずれにしても「水の存在」は攻撃性や不安に対応しようとする彼らの内的努力とその際の緊張を示すものと考えられる。

最後に描線や筆圧に関しては、うつ群にみられた結果が越川（1989）や大森・高江洲（1981）の結果（描線がか細く、筆圧が弱いなど）と一致していた。躁病エピソードを有する双極群と有さないうつ群との違いが、こうした側面にも表れてくると考えられる。

まとめ

本研究では広義の気分障害者を双極群とうつ群に分類した上でF L Tの描画特徴の違いを検討した。その結果、火の形態の如何に関わらず火の躍動感や彩色、サイズなどの描画特徴に双極群とうつ群の違いが見出された。火という情緒刺激を課題とするF L Tには、うつ病性障害者にはない双極性障害者に潜在する精神エネルギーの高さや躁状態における易刺激性と情動の爆発的な発散傾向が、落ち着いた状態でも表されると考えられる。逆に躁状態を呈さないうつ病性障害者の精神エネルギーの低さ、情動の抑制・萎縮傾向がF L Tに表されるものと思われる。特に火のサイズは双極群とうつ群の弁別に有効な指標になる可能性が強く示唆された。したがって、主症状がうつ状態であっても躍動が激しく、サイズの大きな火が描かれた場合は、うつ傾向の裏に躁傾向が潜在する可能性があることに注意する必要がある。

また、双極群とうつ群の描画特徴に違いが見出されたことから、今後の気分障害者の描画研究においても躁病エピソードの有無によって被検者を分類することが重要になることが示唆された。この点で本研究は気分障害者の描画研究に対する新しい知見を増やすことになったと思われる。

さらに、病状の異なる2群が示す描画特徴の違いや健常者、人格障害者、分裂病者のF L Tとの比較から火の躍動感や彩色およびサイズなどが、描き手の精神エネルギー水準や情動表出の程度、情緒刺激への被影響性などをアセスメントするための妥当性と信頼性を備えていることが明らかになってきた。

最後に今後さらに検討しなければならない点を挙げる。①対象者数の増加、②平均年齢

の統制（健常群，人格群，分裂群の平均年齢は22～25歳であったが，双極群は40歳，うつ群は57歳であった），③性差の統制など。

引用文献

- 飯田 真 1974 概説躁うつ病 現代のエスプリ 躁うつ病No. 88 至文堂
- 石田 弓 1996a 火のある風景描画法に関する基礎的研究－健常者と分裂病者の描画内容と描画形式－ 臨床描画研究XI, 214-237.
- 石田 弓 1996c 火のある風景描画法の描画内容と描画形式－人格所害群のF L Tを加えての再分析－ 中国四国心理学会論文集29, 91.
- 越川房子 1989 統合型H T P法における精神分裂病者と鬱病者の描画分析 早稲田大学大学院文学研究科紀要 別冊16集, 39-49.
- 三上直子 1995 S－H T P法 統合型H T P法による臨床的・発達のアプローチ 誠信書房
- 村田桂子・星野良一・大原健士郎 1983 うつ状態のロールシャッハテスト研究－単極性うつ病と双極性うつ病の比較－ 臨床精神医学12 (10) , 1251-1259.
- 大原健士郎 1981 うつ病の時代 講談社現代新書
- 大森健一・高江洲義英 1981 抑うつ心性と絵画表現－特にその臨床図像学的接近 木村敏（編） 躁鬱病の精神病理 4, Pp217-251.
- 佐藤忠司 1978 火焰描画法 ロールシャッハ研究 XX, 99-116.
- Shulman, B. H. 1968 *Essays of Schizophrenia*. The Williams & Wilkins Co., Baltimore.
- （坂口信貴・植村 彰・皿田洋子 1978 精神分裂病者への接近 岩崎学術出版社）
- 高橋雅春 1974 描画テスト入門－H T Pテスト－ 文教書院
- 高橋雅春・北村依子 1984 ロールシャッハ診断法II サイエンス社

（1997年9月19日受付，1997年9月30日受理）

